

一人ひとりを生かす個人学習の指導・高学年

豊郷小学校六年 上野 芳樹

I なぜ、個人学習を大事にするのか

私が国語科の学習に個人学習を取り入れるようになって数年になる。やればやるほど、この個人学習が重要なものと見え、今では、個人学習をぬきにした学習過程は考えられないほどになっている。

「個人学習を取り入れるとどんな良いことがあるのですか。」と問われれば、私は次の5つのことをあげたいと思う。

① 全員が動く学習になる

一斉学習では、話し合い活動が中心になることが多い。だが、全員が話し合いに参加して発言することはなかなかできることではない。活発に発言する子でも、1時間のうち5分もしやれば多い方ではないだろうか。

つまり、大半の子は、45分の授業のほとんどを聞く側ですぐすのである。45分間集中して聞き続けるというのは、大人でもむずかしいことではないだろうか。まして、授業はいつもよどみなく展開しているとは限らない。いや、むしろ、あっちこちでつつかえ、展開していかない場合の方が多いのだ。活動エネルギーに満たした子どもたちにとって、わかりにくい話し合いを1時間聞き続けるというのは、苦痛以外の何物でもない。

それに対して個人学習は、一人ひとりが教材に対して能動的に働きかける作業である。話し合い活動では、ぼんやり聞いていてもそれで済んでしまうが、個人学習では、自分が動かないかぎり、何も進んでいかないので、積極的にならざるを得ない。その分、一人ひとりの学習の密度が格段に濃くなるのである。それとともにまた、主体的に読む姿勢も育っていく。

② 自分のあしどりに合わせて読める

「もともと読むことは、究極においてはひとり読みである。それは、自力の読みとも言えるし、主体的な読み、個性的な読みともいえるだろう。」と今井鑑三氏は言われる。小松善之助氏も、「読みはあくまで、自分の目で、自らの頭で読むものである。自分の歩幅にしたがい、自分の呼吸にあわせ、自分の心臓に聞いて立ち止まるものである。――読みは、もともとひとりのものである。」と、ひとり読みこそが読む活動の中核なのと言われる。私もそう思う。

ところが、一斉学習では、みんなで考え合うわけだから、追究する課題も限定され、ひとりひとりの自由な読みが保証されにくい。また、授業の展開はどうしても反応の速い子のペースが進むことが多く、じっくり考える子、理解に時間のかかる子は、授業に流されてしまうことになる。そういう子どもたちにも自分のペースで、自分が一番学習したいことにじっくり取り組む場を保证してやりたい。個人学習はその有効な場と考える。

③ どの子どもが一斉学習に参加できる土台ができる

自分の読みが十分でないまま、一斉学習の話し合いに参加しても十分な追究はできないだろう。まして、読む力の弱い子にとっては、みんなの意見を聞くのが精一杯というのが実情ではないか。少し込み入った議論になれば、問題意識のうすい子などは授業から離れてしまう。

人の意見が聞ける、あるいは、聞こうとするのは、自分の中に問題意識があり、それについての自分なりの考えを持っている時である。個人学習は、自分の読みを持ち、自分なりの問題意識を持たせること、つまり、一斉学習でどの子ども話し合え、聞き合えるだけの準備をさせる場といえる。

④ 明確な読みの力がつく

個人学習は、ノートを使って自分の読みを書き込んでいく「書き込み」の作業がその中心になる。自分の読みを書くことは、話すことに比べてずっとむずかしい。自分の読みを吟味し、言葉を選んで書きつけていくのは、かなりの集中力を要する作業である。だが、それだけに明確で筋道だった読みに練り上げることができる。確かな読みの力を育てる場としても個人学習は重要なのである。

⑤ 子どもの読みをさぐり、子どもに即した授業をつくるために

子どもの学習ノートを見ることによって、その子がどんな読みとりにしているのか、どんなところを問題にしているのか、また、読み落としているのはどんなところか、といった一人一人の読みの状況が把握できる。中には、教師が解釈していなかったような鋭く新鮮な読みを子どもがしていることもある。そういう子どもの読みの実態をとらえ、子どもらしいふくよかな解釈に学びながら、それをもとにして、子どもの読みの状況に即した一斉学習の構想をたてる。これこそ、子どもに即した授業の原則ではないかと考える。

このように、さまざまな力を育て「子どもが生きる」学習をつくっていくために、個人学習は欠くことのできない学習だと私は考えている。

Ⅱ 個人学習の進め方

Ⅱ どの子の力も引き出し高める個人学習はどうしたら成立するのかⅡ

1 「個人学習の手引き」の作成

一口に個人学習といってもその内容としては、音読・あらすじどり・難語句調べ・書き込み読みなど、さまざまな学習活動がある。その一つ一つについて、ていねいに学習の仕方を教えてやる必要がある。だから、まだ個人学習の経験が少ない学級であれば、いきなり長編の教材で取り組むのではなく、短編の教材を選んでやった方が無理がない。また、1つの教材で何もかもやろうと思わず、特に重点的に指導したいことをしばってやったほうがいいだろう。私は、そう考えてやってきた。

最終的には、子どもたちが何の助けも借りないで自力で個人学習を進める力をもつことが目標だが、それは、すぐに達成できるものではない。だから、学級の習熟度に応じて個人学習の手引きを作ってやる必要がある。次にあげるのは、1学期に取り組んだ「あとかくしの雪」の個人学習の手引きである。

【「あとかくしの雪」個人学習の手引き】

勉強というものは、自分の力で進めることが大切です。自分で考え自分の力で解決することができるようになれば、どんどん力がのびていきます。

自分で読み進める力をつけるためには、次のようなことが出来るようになってほしいのです。今は、手引きとして作っていますが、やがてはこれがなくても出来るようになってほしいと思っています。

①まず、スラスラ読めるまで何度も
声に出して読んでみよう。

まず、読んでみましよう。読めない字、わかりにくいことばなどがあるでしょうが、かまわず読むのです。何度か読めば、読みにくいところもだいたいのけんとうがついてくるものです。

小さな声でぼそ読まずに、できるだけ大きな声で読みましよう。大きな声で読む方が、はやくじょうずに読めるようになります。

◎どうしても読めない漢字があれば、先生や友達にたずねましよう。

②線を引きながら、くりかえし読もう。

これは、①のしごとをする時から始めてもよいのです。

読んでいるときに、意味のよくわからないことばがあるでしょう。それから、「おもしろいなあ」「かわいそうに」「やさしいなあ」「へんだな」「どうしてそんなことするんだらう」などと、いろんなことが頭にうかんでくるでしょう。そういうことがうかんだ文やことばに線を引きながら読むのです。そのとき、線の種類をいくつか変えるとわかりやすいですね。たとえば次のように。

○意味のよくわからない言葉

○ようすや気持ちさが伝わってくる言葉や文

(特に)

○ 「どうしてそんなことをするのだろう」ときもんに思うところ _____ (赤線)

○ ていねいに、くわしく考えてみたい言葉

◎ はじめからたくさん引こうと思わないことです。くりかえし読むうちにだんだん、うかんでくることも、疑問もふくらんでくるのですから。
一回読んで、ひとつかふたつ引ければよい、というぐらいの気持ちでやりましょう。

③ 「はじめの感想」を書いてみよう

①②の仕事をするために、何度も読んでいますね。

ここで、自分が読みながら感じたこと、疑問などを一度ノートに書いてみましょう。

○ 登場人物についての感想

○ これから、もっとくわしく考えてみたいこと。

④ 視写しながら読んでみよう

ゆっくりていねいに、一文ずつ書き写していきましょう。音読していたときには、気がつかなかった小さな言葉にも大事な意味があることを発見できると思います。

⑤ 書き込み

去年も何度か書き込みをしましたが、むずかしいという人が多かったですね。そこで、もう一度、書き込みの仕方についてていねいに勉強してみましよう。

①どんな言葉に目をつけたらよいのか

・その言葉を読むと、

けしきやようすがうかんでくる。

登場人物（ここでは百姓・旅びと）の姿・顔の表情がうかんでくる。

そういう言葉を見つけてみましょう。

★長い文になるときは、その中で特に強く感じる言葉を書き込んでみる。

でかこんでおくといい

②どう書けばいいのか。

その言葉から自分が思いうかべたようす・登場人物の表情・気持ちをそのまま書けばよいの

です。

◎よりよく思いうかべるために

その言葉を考えるとき、必ず、そのまわりの文章とつなげて考えるようにしましょう。そうすると、「なぜ、そんなふうになるのか」ということがはっきりしてきます。関係のある言葉どうしを――↓で結んでおくといいですね。

《手引きの内容についての注釈》

あらすじどりについて

①、②の次に本来はあらすじどりの仕事をさせたい。物語全体の構成をおおづかみしておくことは、いくつかの意味で大変重要だと考えるからである。

①あらすじどりすることによって、物語の全体が見通せるようになる。つまり、物語の主題もおおまかには見えてくる。

②どこに山場があり、どの叙述が重要な位置を占めているのか、ほぼつかむことができる。

③何をこそ追求しなければならぬかがあらすじどりの中で見えてくる。

この「あとかくしの雪」の場合は、わずか、1ページの短編なので、ことさら「あらすじどり」として構えなくても、①②の作業をする中で十分その仕事もできるだろうと考えたからである。

「はじめの感想」を③にするわけ

ふつう、一読したあとすぐに初発の感想を書かせることが多い。だが、たった一読しただけで、まとまった感想が書けるものだろうか。ごくおおざっぱな印象程度なら書けるかもしれないが、きちんとまとまりのある感想を期待することは無理である。むしろ、その子なりにある程度読みこんだ段階で書かせた方が無理がないし、その子のとらえている物語の世界が感想の中に十分表出されるだろう。それが、「はじめの感想」を③におくわけである。（もちろん、一読後の新鮮な感想も大事にしたい。ただし、無理な要求をしないことだ。）

視写について

視写は、ふつうその教材の学習に入る一番始めの作業として行われることが多い。だが、それでは単なる作業に終わるのではないか。音読しただけでは、文をながめていただけでは見つけられなかった小さな表現の違いを発見するのが視写の大きなねらいである。だから、まず音読練習をしたり、文や言葉へのひっかかりをつけ、ある程度の読みを持った上で視写の作業をした方が「読む」ことにつながる視写になると私は考えている。

書き込みについて

個人学習で最も中心的な活動になるのが、この書き込み（ひとり読み）の作業である。だが、子どもたちの側からすると、一番難しいのがこの書き込みなのである。「どんな言葉に目をつけたらよいのかわからない」「ど

んなことを書いていけばよいのかわからない」という子どもたちが必ずクラスに何割かはいるものである。まだこの学習に慣れていない学級なら、大半の子どもがそうであるかもしれない。

なんとか、どの子ども自力で進められるような書き込みの方法はないかといういろいろこれまで試みてきた。

5年のとき「大造じいさんとがん」の手引きでは、次のようにした。

《書き込みのための手引き》

大造じいさんの残雪に対する気持ちがどう変わっていったのかということを中心に書き込みしましょう。

- ①まず、大造じいさんのしたこと、言ったこと、気持ちを書いた文に線を引きましょう。
- ②その中で、特にじいさんの気持ちが強く感じられることばをここで囲みましょう。
- ③はこの言葉を中心に、そこでのじいさんの心の中を想像して書いてみましょう。
 - ・その前後を読むとなぜじいさんがそんな気持ちになったのかわかる言葉や文があります。そういう言葉を線で結んで考えましょう。
- ④情景を描いた文の中にもじいさんの気持ちが出ています。そういうところを見つけて書き込みしましょう。

主人公によりそい、主人公の行動をたどっていくことで物語の主題にせまれる、それが、物語の読み取りの基本的な形である。そういう読み方を学ばせるために、こういう助言を入れたのである。

でも実際には、これだけではなかなか動けるものではない。だから、一斉学習の形で書き込みの勉強を何度もしながら、進めたのであった。

もつとどの子にもわかりやすい書き込みの手引きはできないものかと考えて、作ってみたのが次の「井戸」の手引きである。

《書き込み用プリント》

◎先生が、考えるためのヒントを言葉の横に書いておきました。それをてがかりにして、自分の読みを行間や、下のらんに書き込みなさい。

◎みんなでもつとくわしく考えてみたい問題も見つけましょう。

「井戸」 千葉省三

あしはら
おかし
いど
井戸の小学校は、丘の上にあつたから、井戸がずいぶん深かつた。

おもて
けん
い
の面まで、十間ちかくあると云つた。
(一間は1.8mだから18mぐらゐ)

そうじ
く
なぜのぞくのだらう
ふたがないので、お掃除の水を汲むたんびに、だれでもちよつとのぞ

いて見た。

この井戸の中を見たらどんな感じがするだろう

あかつち かべ つつ

大きな遠目鏡でものぞくように、赤土の壁が、丸い筒になって、うす

とおめがね（望遠鏡のこと）

くら そく き

暗い地の底に消えこんでいた。

この水を頭にかかべてみよう。どんな感じか。

ぼん

そして、はるか下の方に、小さい、円い、お盆のような水が、つめた

こちらで、目をつけてもらいたい言葉を指示し、そこでどんなことを読み取ってほしいのかという問いも入れた手引きを作ってみたのである。この手引きの場合は、どの子どもでもどんな書き進めていくことができた。今まで書き込み苦手にしてきた子どもたちも「こんどのは、やりやすい。書き込みできるようになってきた。」と喜んでくれた。

ただ、この手引きについては、次のような問題点も持っている。

- ① 子どもの自由な読みの可能性を限定してしまう。突拍子もない子どもの読みが出てこない。
- ② 教師の解釈に近付けようという方向性を持ってしまう。
- ③ 子ども自身が主体的に文章に働きかける力を育てることにつながらない。むしろ、受け身にしてしまうおそれがある。

特に③の問題については、手引きを作成する上で十分注意すべき問題だと思う。単に手引きの問題を頼りにひ

とりで読解を進められたら個人学習は成立したと考えるはならないと思う。あくまで、手引きは、やがて自力で読解を進める力を育てるものでなければならぬ。親切に目をつける言葉や読み取り方を問いとしてつけてやるのは、ある段階としては良いかもしれないが、多用すべきものではない。

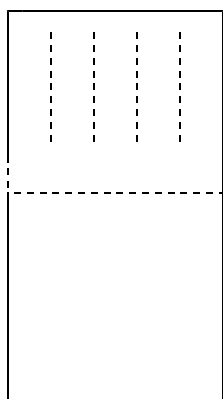
ただこの場合も、まず子どもたちの感想や疑問を叙述に即して出し合う時間があり、それをまとめる形でこういう手引きになるのであれば意味のある手引きになったのではないかと思っている。

こういう経過を経て、やはり、「子ども自身が文章と格闘して何事かを感じ取り、読み取ることをひとり読みの指導の基本におこう」と考えるようになったのである。それが、今回のあとかくしの雪の手引きに出ているわけである。

ノートについて

個人学習の書き込みをするのに、どんな形のノートを作るとよいか、これまでいろいろ試みてきた。

(教材文) (書き込み欄)



基本的には、上のように上段に教材文を書き（あるいは貼りつけ）、行間や下段に自分の読み、友達の読みなどを書き込む形を取っている。

ノート見開き2ページを使つてやるとかなりゆつたりと書くスペースができる。

また、更半紙を横に使うとかなり広い範囲の教材が見通せるという利点がある。

新しいノートを渡してやるのも意欲をかきたてさせる一つの方法である。

2 個人学習の実際

ここでは、手引きを使った個人学習を実際にどのように進めたのかを報告したい。

① 立目読練習日

Ⅱ 「まず、スラスラ読めるまで何度も声に出して読んでみよう」Ⅱ

「あとかくしの雪」は、そうむずかしい漢字も語句もないので、各自自由にどんどん読ませていった。私のクラスには、残念ながらもまだたどたどしい音読しかできない子が数人残っている。音読練習の間、教師はそれほど個々の子どもに気を配らなくても済むので、それらの子を前に集めて私といっしょに音読練習した。

他の子どもたちか②へ進んでも、その子どもたちは音読練習を続けさせた。個人学習というのは、その子の力に応じて最も大事だと思う仕事を存分にやらせることがねらいなのだから、こういう自由さがあつてよいと思うし、その方が「学習」になる。手引きの内容を全部仕上げねばならないと考えない方がよい。

実際、その子どもたちは私といっしょに練習することをとても喜んで、生き生きと音読練習していた。

② 初めの感想

前に述べたように学習の始めでまとまった感想を要求すべきでないと思った。だから、「書けるだけでいい」と言っただけでいい。何人かの感想を参考までにあげておく。

「あとかくしの雪」 初めの感想

・百しようは、やさしい人と思う。旅人にやさしい。貧乏やけど、心の中は、金もちでも負ける（貞幸）

・この貧乏な百姓は、親切だなあと考えた。ほかの百姓だったら「でてけ！」といわつたかもしれないけど、この百姓は、「ああいいとも」と親切に旅人をむかえたで、そう思った。それに、その旅人一人のために、しらない人なのに、もてなしできんから、他人の家から盗むなんて、自分の食事もろくにないのに、大根やきを旅人にあげたから、やさしい人だと思った。（暢子）

・百姓は、自分の食べるのもやつとなのに、旅人をとめてやつたし、ダイコンまでぬすんでたべさせてやつたから、やさしい。けれど、いくら食べさせてやりたくてもぬすむのは、あかんと思う。旅人は、やつとの思いでとめてもらつてうれしい。

（ぎもん）このことは、二人だけしか知らないのに、どうして伝わってきたんだろう。旅人がそんなやさしい人がいたといったのかもしれないけど、ダイコンをぬすんだことまで知らないから。

（幸則）

・旅人は、3げんぐらいことはられて、びんぼうでもいい、くわしてもらえんでもいいから、とにかくやつととめてもらつてうれしくてたまらない。

百姓は、そのとき、3げんぐらいことわられたのに、またことはつたら、かわいそうだなあと思つて大根までぬすんできてくわしたから、この人はいい人だなあと旅人は思いながら食べたと思う。たびびとがとぼりとぼりあるいてきたところを見たとき、3げんぐらいことわられたと思つていたと思う。（和美）

・百姓は、びんぼうだけど、とてもやさしい人だと思いました。自分の食べるものもろくにないのに旅びとをとめさせてあげたし、旅人は、なにもいらなないといつているのに、もてなそうと思つていてからです。

旅人は百姓の家にくる前にどこかにいってことわられたと思います。なぜかというと、「どうだろうか」といったからです。それに、旅人もちよつとえんりよしているからやさしいと思います。

百姓は大きな家の人と言って大根をもらったらしいのにどうしてぬすんだのかが、ぎもんに思います。(明子)

感想を読むと、どの子も旅人のあわれさや、百姓のやさしさを感じ取っている。ここを読むの第1の土台として次の書き込み読みへ進めばよいのだと思う。できれば、感想を書き終えた段階で感想交流の場を持つとよかったと思っている。みんなで感想を出し合うことによって、基本的な読み取りを共有できるし、これからの追求の方向もおおまかにつかむことができたのではないかと思う。

③ 視写での発見

硬筆練習の意味をかねて、書写の時間を使って書かせた。短編なので1時間でほぼ全員が書き終えられた。視写をやっているときおもしろい発見があった。

「先生、貧乏で、漢字で書いたること、ひらがなで書いたところがあるで」とある子が言い出した。すると他の子も、「ぼくもそこへんやなあと思ってた。」という。これは、音読している時はあまり意識に残らなかったのが、書くことによってくつきり浮かんできた好例である。「あとでよく考えてみよう。」ということで残しておく、一斉学習の中でもう一度取り上げた。そしてこの漢字とひらがなのちがいを考えることによって、みんなの読み取りがいつそう深められることになったのである。

④ 書き込みの指導について

まず、全員がもう一度新たな気持ちで文を読み、「景色・ようすがうかぶ言葉」「百姓や旅人の姿・表情が浮

かぶ言葉」に線を引かせた。

10分後、どれぐらい線を引く言葉が見つけれられたか、調べてみた。

1	5	こ	...	1	1	人		
6	5	1	0	こ	...	1	2	人
1	1	こ	以上	...	6	人		

こんどは、それを出し合ってみた。すると、少ない子というのは、一文全部引いてあるから少ないということだった。多く引いている子というのは、さらに、その中の限定した言葉に線を引いているのだった。それぞれが見つけた言葉を発表させ、線を引かせた。子供たちの見つけた言葉を整理すると、次の通りである。

あとかくしの雪

木下順二

あるところに、なんともかとも貧乏な百姓がひとり、住んでおった。

ある冬の日のもう暗くなったところに、ひとりの旅びとが、とぼりとぼり雪の上をあゆんできて、

「どうだろうか、おらをひとばん、とめてくれるわけにいくまいか」というた。

百姓は、じぶんの食べるもんもろくにないぐらいのもんだったが、

「ああ、ええとも。おらとこは貧乏でなんにもないが、まあ、とまってくれ」というと、旅びとは、

「そうか、それはありがたい。おら、なんにもいらんぞ」

というて、うちにあがった。

けれどもこの百姓は、なにしろなんともかともびんぼうで、何をひとつ旅び
とにもてなしてやるもんがない。それで、しかたがない、晩になってから、と
なりの大きいえの、大根をかこうであるところから大根を一本ぬすんできて
大根やきをして旅びとに食わしてやった。

旅びとは、なにしろ寒い晩だったから、うまいうまいとしんからうまそうに
しながら、その大根やきを食うた。

その晩さらさらと雪はふってきて、百姓が大根をぬすんできた足あとは、あ
ゆむあとからのように、すうつとみんな消えてしもうたと。

この日は旧の十一月二十三日で、今でもこのへんではこの日には大根やきを
して食うし、この日に雪がふればおこわをたくもんもある。

ほとんど、目をつけてほしい言葉は出ているといってよい。

こうして、てがかりとなる言葉を出し合った後、各自で、書き込みをやらせた。みんながどんな言葉に目をつ
けているかを交流し合うことよって、どの子も書き込みの糸口をつかむことができた。その後の書き込みの作
業に入ったが、正味20分程の作業の間何も書けなかった子が2人。他は、みんな何ごとかは書いていた。

子どもたちの書き込みにどう助言するか

「あとかくしの雪」では、ほとんど子どもに任せてこちらから口をはさむことはしなかった。どこまで自力で
できるかためしてみたかったからである。そして、一人ではどうしても進められない子数名だけを前に集めてそ

の子らといっしょに書き込みをした。音読練習の時と同様、その子たちは、私と一緒に勉強することを喜んでくれた。援助が欲しい子にこそ手をさしのべるべきで、それ以外はできるだけ自力で取り組ませたいと思う。

ところで、ふだん私が書き込みの学習中にどんな口入れをしているかについては、たまたまのぞいた5年の教室でやっていた「お母さんの木」の授業での記録があるのでそれを参考までにあげておく。

『書き込みへの口入れ』

「書き込み」の間も若林先生は個々の子どもたち間を回っているような言葉かけをされていた。そのことも非常に大事だと思う。回りながら、つまずいている子の相談相手になってやることはもちろん、子供たちの書き込みで、全体に広めたいこと、みんなに確認して分からせてしまう方が良いことなどを見つげるためにも教師はこまめに神経をはりめぐらして動く必要がある。ある意味では、一斉学習以上に大変な学習であるともいえる。

私も子どもたちの間を回りながら、少し口をはさんだ。例えば次のようなことである。

教材文

ところが、ある日、その木はなんの変わりもなかったに、役場の人があらたまつてやってきて、一郎が中国大陸で、メイヨノセンシヲトゲラレタという知らせをくれた。

お母さんは、むねもつぶれんばかり、たいそうおどろきなさったけれど、じつとこらえて、手をついて、

「ご苦労さまでございました。あの子が、お国のお役にたてて、うれしゅう思います。」

と言いなさった。

その子の考えを具体的なところまで引き出す

岳君のノートを見ると、「じつところらえて」のところに「泣いたらいいのに、なんでこらえたのか
わからない」と書いてあった。

問題としてとらえているのは大事なことだけど、こういうふうには「わからない」という形で書き込んでしま
うと、問題に正面からぶつからないで、逃げてしまうことになりかねない。

そこで、岳君に

「そこ、「わからない」と書かないで、なんとか自分の考え作ってみて。想像でもいいから」

と要求した。岳君はしばらく考えていたが、

「恥ずかしかったんちがうかな。」

と言った。私は、

「恥ずかしかった、てどういうことかな。みんなに笑われるのがかんなかったということ？」

と問い返してみた。すると、岳君は

「笑われるんがかんなかったのとちがって、……なんか、泣いたら死んだ一郎に申し訳ないみたいな……」

とすごいことを言い出してきた。岳君は、「メイヨノセンシ」の重みを感じ取っているのかどうかは、まだわか
らないが、そこをつなげて読み深めていける内容を出してきているのだ。

「お国のため死んだ一郎の名誉に傷がつくということかな。それ、とつてもいい考えだから書いといて。」

と言つてそこを離れた。こういうふうにはその子なりの具体的な考えを持つところまでやつておかないと一斉学習
で考え合い、読み深めることはむずかしいのではないかと思う。

問題をみんなに広げる

脇坂さんのノートを見た。さつき岳君が問題にしていたところは、空白になっている。でも、ここは、みんな

が自分の読みをもつてほしいところなので、聞いてみた。

「ここむねもつぶれるほどおどろいたのに、じつとがまんしているね。なんでがまんしたんやと思う？」

すると脇坂さんは、「わからん。」とあっさりいう。全く見当がつかないという顔だった。そこで、「岳君もそこ考えてね、「恥ずかしかったで」といつてるけど、どう？」

と岳君の読みを例に出して問い返してみた。それに対して脇坂さんは、「恥ずかしかったのとは違う。」

ときっぱり言った。でも言葉にはならないらしかった。

「そこ、となりの人と相談してもいいから、自分の考え見つけといて。」

と言うと、さっそく隣の室田さんと相談しはじめていた。

こういうふうには、友達の読みを紹介してやって、考えやすくしてやったり、みんなの問題にしていく作業も教師の仕事として大事ではないかと思う。

この部分などは、

「ちよつとみんな聞いて。今岳君や脇坂さんが「じつところらえて」のところ考えているんな考えが出てるんや。みんなもそこ考えてみて」

というふうに学級全体の子どもに広げてもらいたいかもしれない。

前後と関係づけて読む力を育てる

功子さんのノートを見ると、「むねもつぶれんばかりたいそうおどろきなさった」のところに「しんじられないほどのおどろき。うそみたい」と書いてあった。これは、正しい読み取りではあるが、できれば、なぜ「しんじられないほどのおどろき」になるのかということまであきらかにさせたい。その前の叙述に「ところが、ある日、その木はなんの変わりもなかった」というところがある。お母さんは戦死の予想などまったくいなかったのである。だから、「むねもつぶれんばかり」になるのだ。そういう文のつながりができるだけ意識して読ませたいと思う。功子さんには、

「とつてもいい読みやね。その前に「その木はなんのかわりもなかったに」て書いてるから、安心してたのに突然戦死の知らせが来たからしんじられないほどびっくりしたんやね。そういう言葉を線で結んでおくといい」といって線で結んでやった。

こうした「つながりのある文や言葉を線で結ぶ。」というのも一人読みの作業でぜひやらせたいことである。ある時間、取り立てて指導してやるとよい。

日夏先生の助言 「書き込み一覧表」

Ⅱ 高学年部会の話合いよりⅡ

子どもたちの書き込みノートを見ながら、もう1時間の個人学習をどうするか話し合った。

子どもたちのノートには、キラッと光る読みがいくつもある。こういうのをもう少しみんなに広げる時間にして、ようということになった。その時日夏先生が

「子供たちの書き込みをプリントにして配ってやるといいなあ。ぼくは、前のとき、そうした。」と言われた。

一人ひとりの書き込みを書き出すのは、大変労力のいる仕事だが、それさえあれば、まだ書けない子のヒントになるし、自分の読みを他の子と比べて考えなおしたりできる。教師の方もそのプリントを持っていることで、子供たち一人一人の読みが一目で把握できる。ぜひやってみようということになった。

こうした様々な口入れ、プリントなどを手がかりに子どもが自力で書き込み読みを進めるための援助をしてきた。そうして、ほんの少しずつではあるが、私の援助なしに自力でのひとり読みを進められる子が増えてきている。また、言葉に対する感受性も鋭く豊かになってきているように思う。「あとかくしの雪」で子どもたちがあれだけ文章の核となる言葉をおさえられるようになってきているのだから。

Ⅲ 個人学習から一斉学習への展望

以前は、個人学習から一斉学習への展開がひどく難しいもののように見えていた。それは、いわゆる「課題解決学習」という幻影にまどわされていたからである。個人学習段階で生まれた疑問・問題から追求課題を煮詰めていって、一斉学習の場で追求・解決するというのが個人学習をふまえた一斉学習のあり方だという固定観念があった。そんなこむずかしいことできるわけないというひねくれた思いさえあった。

しかし、「ごく素朴に一人ひとりが読み取ったことを出し合うことから出発すればいいのではないか」という石井先生の「ごんぎつね」の実践を聴いて、急に世界が明るくなったような気がした。安易な問題作りで理屈っぽい授業を重ねるより、一人ひとりの個性的な読みとりを聞き合い、自分ひとりでは読めなかった広がりや深まりのある読み取りを共有することの方がはるかに意味がある。そしてそれは、りっぱに個人学習をふまえた一斉学習といえるのではないかと思うようになった。また、そういう読みの交流の中で新たに生まれる問題こそが真にみんなの「追求課題」として受け止められるに違いないと考えるようになった。

今回の「あとかくしの雪」では、そういう素朴な読みの交流からさらに読み深めるべき部分をさぐるということとをねらった授業を個人学習の次に2時間とってやった。今、記録を読み返してみると、流し過ぎたなあという反省がある。あとでもう一度でいいいに考えるのだから、今は問題として意識しておけばいいだろうという感じで進めているのだが、やはり、それでは課題意識も弱い。むしろその時々においてもっと追求しきったほうがよかった。その結果わかってしまえば何も課題として残す必要もないのだ。

とりあえず、参考までにその時の授業記録をあげる。

『あとかくしの雪』

|| ひとり読みを出しあい、課題を明確にする ||

2時間とって、あとかくしの雪の個人学習をやりました。そこでひとりひとりが読み取ったものを出しあって、おたかいの読みの似ているところや、ちがうところをはっきりさせることをめあてにした授業です。

T 先生が、文章の区切りまで、読みますから、その中であつたら、出して下さい。

『あとかくしの雪』

真人 この題は、百姓が雪に助けられた話やから、つけられたと思う。

菜穂子 とつても貧乏な百姓で、(不明)

Cs 聞こえん。もつとはつきり言つて

T 菜穂子、「このことばから」ていうのを言つて
菜穂子 「なんともかとも」から、ごはんもろくに

食べてない。

保 ふつうの貧乏ではない。

寛子 服や家も古いし、ぼろぼろ。

勇也 「貧乏な百姓がひとりすんでおつた。」て、ひ

T 雪に助けられた話だから。

他の人ある？

Cs そこは考えてへん。

美希 雪がやさしい百姓の味方になったと思う。

裕幸 雪が百姓の味方になってくれたん。

T うん、つまり、百姓のぬすみのあしあとを、味方に

なつてかくしてくれた雪だから、「あとかくしの雪」

そういうことですか。

美希(うなづく)

T はい、題はとても大事だから、また、後でていねいに考えましょう。

あるところに、なんともかとも貧乏な百姓がひとりすんでおつた。

真ひと 「ひとり」というところで、ひとりぐらしで

とてもさびしい。

智士 よめもない。

勇也 かわいいそうよ。

T はい、ここまで聞いて、ぼくは、そうは思わなかつたという意見の人ある。

裕幸 ぼくはな、「のけもんにされてる」というたやん

なんか、それおかしい。

とりだけですんでな、かわいそう。

Cs いっしょ。

暢子 わたしは、「なんともかとも」と「ひとり」

というところで考えたんやけどな、他の百姓よりもっとぴんぼうでな、のけものにされている。

大輔 ぼくも暢子といっしょでな、「なんともかとも」というところだな「百姓がひとり」というところやな、村の關係ないいうか、のけもんみたいなもののような気がする。

和幸 ひとりでな、村の外れの一軒家に住んでるみたい。

真人 この百姓は、夜さびしくて、だれもしやべる相手がない。

ある冬のもう暗くなったところに、ひとりの旅人がとぼりとぼり雪の上をあゆんできて、「どうだろうか、おらをひとばんとめてくれるわけにいくまいか」というた。

明子「もう暗くなったところに」のところで、長い距離を歩いてるで、旅人にとっては、いつの間にか暗くなっていた。

暢子 長いこと旅をしているから、こんなにおそくなっている。

いくら貧乏でも村人やろ。それに、この百姓やさしいやん。みんなわかっているとと思うんよ。ほんで、そういうことはないと思う。

大輔 あ、ほれで。「なんともかとも貧乏」なんやろ。相手にしてもらえへんのよ。貧乏すぎて。

T だれから？

大輔 村のみんなから。ばかにされてるのよ。

T 安田は、そうじゃないんじやないか、という意見なのね。安田君みたいな考えの人ある？（10人ぐらい）じゃ、ここ問題としてのこしておきましょう。

力 よめも、というけどな。このおっさんもはじめは貧乏じゃなかったと思う。ふつうの家やったんやけど、にげられて、働く気力もなくなったんと思う。

菜穂子「とぼりとぼり」のところやけど、なんげんもことわられて、ほれで、つかれきつてがっかりしてる。

貞幸 さみしそうにあるいてる。

哲郎 もうなんげんもことわられてな、しよぼんとしてな、もう、とめてもらうことはできないかなとおもってる。

智士 つかれきっている。

T 「とぼりとぼり」ね。

ここ、3つ出えますね。

つかれがある。さみしい。ことわられてがつくり大輔「もう暗くなったところに」というのはな、旅人の

T 「もう」には、ずいぶん長く歩いているという感じがある。

裕幸 「もう暗くなったところ」やでな、旅というのは、もう、夕方くらいにおわってたんよ。ほんでとまるところ、さがしてたんやけど、ことわられたでほんで、こんな暗くなったの。

真ひと この時まで歩いているということは、何げんも断られている。

Cs ぼくもほう思う。

今までの旅で疲れているのも少しはある。

T 旅びとだから、きのう出て明日着く、というのではない。もう、今まで何日も、ひよつとすると、もう1年以上も旅を続けているのかもしれない。そういう旅のつかれからもくる。

真ひと えつとな、「ひとりの旅人」やでな、ひとりでさびしいから「とぼりとぼり」というのもある。

真人 もうひとつある。「雪の上をあゆんできて」と書いたるでな、雪の深いところをとぼりとぼりあるいてるから、さびしそうになるん。

元気がでん。

T 疲れているうえに、つめたい雪の道。

智子 「ひとばん」というところだけど、「ひとばん」というのが書いてないと、何も感じないけど、

「とぼりとぼり」というところだな、なんか、何回も断られてな、暗い旅人の心が出ている。

T 今言ったの、わかっただ？「暗くなったところ」に旅人の心の暗さも感じられる。

大輔 ほんで、「とぼりとぼり」は真ひとが言ったみたいは何回もことわられてる。

力 「暗くなったところ」よりも、「とぼりとぼり」にもっと旅人の気持ち強く出ている感じがする。

裕幸 「とぼりとぼり」の中に、もうなんげんもことわられて、いうのもあるし、「ひとりの旅人」やでな、

T ほう、なんで。

貞幸 今まで断られてきてるでな、暢子 貞幸くんにたるんやけどな、さつきことわられたでな、ああ、この百姓はとめてくれるかなて不安なの。

哲郎 がっかりしてるやん。だから、なんとなく、もうとめてもらえへんかもしれん、と思つて。

T 半分以上あきらめがあるのね。

哲郎 ほんで、「とめてくれるわけにいくまいか」てこわごわ言うてる。

T 今言うてることわかる。

真ひと 貞幸君ににてるんやけどな、何回も断られてなとても心配で、弱気になつてるの。

裕幸 今まで何回もことわられてるで心配になつてほんで、その心配になつてきてるのが、「もう暗く

なっひとぼん」というのがあると、ほんとうにとめてほしいとたのんでいる気持ちがかかる。

T はい、言葉の方で。

美希 「ひとぼんでもとめてほしい」

T なんとしてもとめてほしいんね。

菜穂子 ひとぼんでもいいからとめてほしい。

貞幸 「どうだろうか」てこわごわ言うてる。

亜紀子 「とめてくれるわけにいくまいか」の「か」がな、なんか、「お願いします」というてる感じがする。

T 「いくまいか」ここになんとしてもとめてほしい必死さがでている。

力 あの、安田君が「もう暗くなったころ」は「どうだろうか」につながるというんだけど、「いくまいか」にもつながると思う。「どうだろうか」て頼んでるやん。ぼくは、「いくまいか」にもそんな気持ちがあつて、「たのむでとめて」て。もうぜいたく使われぬ。

保

たころ」やでな、そことつながる。

勇也 「とぼりとぼり」でつかれてるやん。ほんで「どうだろうかおらを……」てな、やっときたんやで、「とめてください」て心の中で言うてる。

大輔 ほれによく似てる。ここでことわられたらな、今日も野宿やでな、旅人も必死になつて頼んでるような気がする。

力 なんげんも断られているから、よけい歩きつかれるんやと思う。

T じゃ、次いくぞ。

「ああ、ええとも。おらとこは貧乏でなんにもないが、まあ、とまってくれ。」

寛子 「ああええとも」の「ああ」で、百姓のやさしさがわかる。